

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5 月 1 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007～2011

課題番号：19720146

研究課題名（和文） 韻律中心の英語音声教育の有効性：聴解及び発話テスト（アクセント度判定）による検証

研究課題名（英文） Global Foreign Accent and the effectiveness of the prosody-oriented approach.

研究代表者

秋田 麻美子（AKITA-ORII MAMIKO）

早稲田大学・教育・総合科学学術院・准教授

研究者番号：30334585

研究成果の概要（和文）：音素(音素識別訓練)よりも韻律レベル（音変化等）を中心とした音声教育が、日本人英語学習者の聴解および発音能力全般の向上に重要な影響を与えるかどうかを調査した。大学在学中の日本人英語学習者から、長期的かつ多角的に聴解および発話データを収集するため、3つの被験者グループを対象に実験授業を半期間実施した結果、韻律指導の有効性が検証された。さらに、韻律教育中心にコミュニケーション・テキストを試作し、その教育効果を検証した。同一のリスニング教材を使用して、

研究成果の概要（英文）：This pretest-treatment-posttest-delayed-posttest design study investigated the relationship between global foreign accent (GFA), which is an impressionistic judgement of overall non-native pronunciation (see Anderson-Hsieh, Johnson & Koehler 1992) and changes in the production abilities of adult Japanese English learners in a regular classroom setting; this was done through two instructional approaches: segmental and prosody-oriented. Results suggest that the prosody-oriented approach effectively improves learners' phonology.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,000,000	0	1,000,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	349,586	104,875	454,461
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
総計	3,549,586	764,875	4,314,461

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：第二言語習得 教授法・カリキュラム論

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本における英語音声教育

思春期以降の外国語学習では、リスニングと発音面において特に困難を伴う場合が多いことは

よく知られていることである。近年では、学校教育においてもリスニングと発音学習の重要性が認識されているところであるが、以下の点で不十分であるといえる (Leather 1983; Pennington 1989; Morley 1994; 渡辺 1995)。

- ① 聴解訓練では、音素の識別に終始し、(例えば、/r/と/l/など) 英語特有の強勢リズムや弱形、語の境界が不鮮明になるなどの連結や脱落現象、イントネーション等、韻律レベルの音変化については取り上げない場合が多い。
- ② 授業内のリスニング活動においては、1) 繰り返し聞き取り作業を行う 2) 学習者により多くの英語に触れさせるよう配慮するということに限定され、英語の音変化の聞き取りのコツなどの指導は行われないことが多い。
- ③ 発音練習では、日本人にとって困難な音素を散発的にとりあげるなど、発音練習を単語レベルで行なっていることがほとんどであり、文章レベルでの指導や、音変化の指導はほとんど行われていない。

## (2) 英語音声の習得・教育方法研究の現状

英語音声の習得過程：音素レベルの研究が多く、韻律レベルの調査は十分に行われてきたとは言い難い。

音声教育方法の研究：韻律レベルでの Instruction の有効性（ここでは韻律教育と呼ぶ）は、渡辺(1995)を始め、Gilbert (1995) や Pennington (1989; 2000) 等で指摘されているが、韻律中心の音声教育の有効性は十分に調査されているとはいえない。

- ① 韻律教育の重要性を指摘している研究は多数あるが、韻律教育の有効性についてデータを用いて実証した研究、特に長期的実験データを提示している研究は少ない。
- ② 韻律教育を重要視した英語音声テキスト

トは多数出版されているが具体的なデータを示して教育効果について報告しているものは少ない。

## 2. 研究の目的

### 韻律教育(聴解・発音)の有効性の検証および効果的な音声教育教材の開発

音素(音素識別訓練)よりも韻律レベル(音変化等)を中心とした音声教育が、日本人英語学習者の聴解および発音能力全般の向上に重要な影響を与えるかどうかを調査する。大学在学中の日本人英語学習者から、長期的かつ多角的に聴解および発話データを収集する。さらに、韻律教育中心のテキストを試作し、その教育効果を検証することを目的とする。

## 3. 研究の方法

同一の市販リスニング教材を使用して、①音素識別訓練中心の教育 ②韻律中心の教育、もしくは③会話練習中心の3つの被験者グループを対象に実験授業を半期間行う。受講前と受講直後、半年後の3回にわたって学習者の聴解能力と発話能力をグループごとに測定し、各教育方法の効果を比較する。

(1) 被験者：早稲田大学 教育学部 1 年次生 一般英語選択授業受講者

(2) 実験グループ：

- ① 音素教育群
- ② 韻律教育群
- ③ 統制群(各 30 名ずつ)

(3) 実験(授業)計画：

各グループ共通の教育内容 同一教材を使

用しリスニング・内容理解・発話練習を半期  
間行う。(90分 x 13回)

各グループ特有の教育内容

- ① **音素群**：日本語音素との対比説明・音素の個別練習・似ている音素の識別練習
- ② **韻律群**：強勢リズム・弱形・音変化（同化・連結・脱落など）の説明および発音練習
- ③ **統制群**：音声教育は行わず、比較文化的な観点で教材を解説し、ロールプレイなど実施

#### (4) データ収集：

3回にわたり聴解テストと発音テストを実施し、各教育効果を測定する。(テスト実施時期：①受講直前 ②受講直後 ③受講から半年後)

#### ①聴解テストの内容

- ・短文30文のディクテーション
- ・会話文のディクテーション

#### ②発音テストの内容

- ・短文30文の読み上げ（申請者本人が採点）
- ・会話文(30秒程度)を被験者が読み上げ、英語母語話者教師が**アクセント度**などを判定する。

#### (5) データ分析項目：

#### ①聴解テスト&発音テスト(短文)の分析項目

- ①音素（母音&子音） ② 脱落 ③ 連結
- ④ 弱音 ⑤ 同化 ⑥ 未破裂音

#### ②アクセント度の判断項目（TEFL専門家の英語母語話者3名による9段階評価）

- (i) **音素**（母音と子音） (ii) **韻律**（音節、強弱ストレス、脱落・同化・連結等の音変化、

イントネーション） (iii) **流暢さ**（発声やスピード、ポーズ） (iv) **総合的なアクセント度**

#### 4. 研究成果

##### (1)聴解能力

すべての実験群で聴解力の向上がみられた。本研究では、発音指導は聴解力には影響がみられないという結果であった。

##### (2)発音能力

①Posttest と delayed posttest においては韻律群で、統制群と音素群を上回る結果が得られた。

②Posttest で見られた能力の向上は、delayed posttest でも維持された。

③アクセント度判定においても、韻律群でのみ能力の向上がみられ、delayed posttest までその能力は維持された。

以上のような実験結果は、本研究課題中の2007年度および2008年度のデータ収集で検出された。また、本申請者の科研課題：若手(B) [2004-2006年, 課題番号 16720135]におけるデータ収集でも同様の結果となったことから、韻律群の優位性はほぼ確実であると判断した。

#### 聴解・発音指導テキストの開発とデータ収集

そのため、当初の研究計画の後半部分である、コミュニケーション・テキストの開発については、韻律指導を中心とすることにした。また、先行研究や諸文献から、統合的なコミュニケーション指導が有効であることを踏まえ、リスニング指導(特にリスニング・ストラテジーの使用)を中心とし、その中で発音指導

も併せて実施する併合型指導のコミュニケーションテキストを開発することとした。

2008 年後半よりテキストの開発に取り組み、短期間の実験授業を複数回実施の上、本申請課題最終年度の **2011 年度**に再び大学の通常のカリキュラムの中で半期間の**データ収集を実施**した。(東日本大震災の影響から大学暦が変更され、前期 9 回しか実験授業を実施できず。)

#### 実験計画の概要：

・大学生対象の英語リスニング教育において、Top-down型およびInteractive型指導が学習者のリスニング力向上に有効かどうか、ディクテーション中心の伝統的 Bottom-up 型指導との比較により検証した。

・リスニング力の測定は、Web 試験「**WeTEC**」を採用し、実験授業前と実験授業後に実施し、テスト中の「**大意把握**」と「**具体情報聞き取り**」、及びその「合計点」を分析対象とした。

・実験授業では、(i)Bottom-up 群へのディクテーション指導、(ii)Top-down 群への Listening strategies 指導、(iii)**Interactive 群への Listening strategies 指導＋韻律(音変化)指導**を行った。

・実験結果：大意把握、具体情報聞き取り、およびその合計点において、実験授業前後で、実験 3 群間に差があるとは言えないという結果になった。しかし、被験者内効果の検定において、Interactive 群でのみ、全ての分析項目で点数の上昇が見られ、Interactive 群のリスニング力が広い範囲で向上を見せたといえる。

2011 年度の実験授業においては、韻律指導を併用する Interactive 群の優位性はやや見られ

た程度であった。2011 年度で本研究課題は終了したが、2012 年度より開始した基盤研究(C) (研究課題：24520660)において、リスニングテキストの改良作業を行い、また、実験授業を 20 回に延長した上でデータ収集を実施し、さらに韻律指導の有効性、聴解指導の効率化の検証を行う予定である。

#### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 4 件)

(1) Mamiko Akita-Orii & Kyoko Oga (2012). A comparison of three different methods of teaching listening comprehension. 『英語音声学』日本英語音声学会, 第 16 号 (査読あり) (3 月刊行予定)

(2) 大賀京子・折井(秋田)麻美子(2012)「リスニングストラテジー指導と英語音変化指導併用の試み」『北海道教育大学紀要』人文科学・社会科学編. 第 62 巻 (pp. 75-88) (査読なし)

(3) Mamiko Akita-Orii. (2011) Prosody training and instruction in listening strategies in EFL classrooms. Official Proceedings of the Asian Conference on Language Learning (ACLL 2011) (pp. 313-325) (査読なし)

(4) 秋田(折井)麻美子 (2008). 「英語母語話者による日本人の英語発音のアクセント度判定とその判断要因分析」『英語音声学』第 11 号・第 12 号合併号 (pp. 265-280) (査読あり)

〔学会発表〕（計 1 件）

- (1) Mamiko Akita-Orii. (2011) Prosody training and instruction in listening strategies in EFL classrooms. Asian Conference on Language Learning (ACLL) (2011, June. Osaka)